チョコレイト・サイエンス

科学広報、試行錯誤で開拓

凛としていきる 理系女性の挑戦

「2位じゃだめなんでしょうか？」。事業仕分け（2009年）での発言を覚えている人も多いだろう。そのころ、私は茨城県つくば市の科学館に勤め、近隣の研究所に出入りしていた。研究者の事業仕分けに対する反応はさまざまであったが、今振り返ると、広報における一つの転機だったと思う。良い研究さえしていれば認められる時代から、研究の目的や意義を広く説明しなければならない時代へと変わったのだ。

大学卒業後、教員を経て科学館へ移った。翌年には研究者らの協力を得て、特別展を行った。わずかな予算ながら、1カ月余の期間で入館者数は前年比3万2000人増。そこから年々大きくし、ひと夏5万人規模にした。研究者の方々の献身的な活動があったからこそ成しえたと今でも思っている。

ワークショップ「チョコレイト・サイエンス」

研究機関との交流も増え、企画を練るため、多くの研究所で勉強させてもらうようになった。そこで感じたのは「伝えたい」と思っている研究者が多くいること。話を聞くと「そうだったのか！」と感動、驚きの連続。研究所からの情報発信に関心を持ち始めていた。

10年に研究所の広報に就いた。研究所がプレゼンスを示すべく動き始めたころだ。高エネルギー加速器研究機構は知っていたが、その物質構造科学研究所なんて聞いたこともなかった。ホームページ（HP）すらなかなか見当たらない。広報を立ち上げたばかりだったのだ。

研究所のロゴ、HP、パンフレット制作など、広報の素地づくりに着手した。次はコンテンツ制作と運用、そのために情報収集の仕組みを作り、ようやく情報発信の道ができた。でもこれは最低限。感動、驚きを伝えるにはほど遠く、魅力的で楽しめるコンテンツが必要と考えていた。

そして作り上げたのが「チョコレイト・サイエンス」。油脂の結晶型と、おいしさにつながる物性の関係を確かめるワークショップだ。新聞やテレビなどに取り上げられるようになった。「チョコの研究なんて初めて知った」という声は、意外にも内部からもあった。メディアに取り上げられて良かったと思う反面、知らなかったのかと消沈もした。情報を出すだけでは、届かないと実感した。

研究所における広報は、まだ黎明期。何をすべきか、効果的か、試行錯誤しながら進んでいる。

企画協力・日本女性技術者フォーラム（JWEF）

（火曜日に掲載）

高エネルギー加速器研究機構 物質構造科学研究所 広報コーディネーター
餅田 円

〈プロフィル〉日本大学卒業後、理科教員を経て、科学館へ転職。展示や催事を企画運営。2010年より現職。

無断転載・複写禁止©㈱日刊工業新聞社